

「圧倒的ブラック」

作 F O ペレイラ宏一朗

登場人物

男 1

男 2

男 3

女

舞台は空虚。中央にひとつ箱馬が置いてある。

周りに男たちがうごめいている。

♪ Dick Dale [Misirlou]

男 1 ここは、宇宙の果て！の果ての果て！つまりどこでもない場所！ここに三人の男達がいる！男たちはあらゆる知識を持ち合わせていた！そしてあらゆるものを超越していた！男たちはこの空間で無限に生き続けてきた！そして、気が遠くなるほどの長い時間、あらゆることについて語り合った！そして語りきった。彼等は頭がすこぶる良かったので、そしてお互いのことを理解していたのでもはや話しても同じことの繰り返しになることを予測して語り合った時間の倍の時間一言も発しなかった。あれからどれくらいの時間が流れただろう。ここに一つ！・・・四角い、木でできた箱が置いてある。これは今しがた、さっき、つい先ほど、いや、たった今現れた！急に、現れた。これはいったい何の象徴だろうか。我々は、これについての知識を持ち合わせていなかった！いや、持ち合わせていないと言うのは嘘になるだろう！我々はこれを知っている！（ゆっくりと指をさす）箱馬だ！そう、箱馬だ！六寸×一尺×一尺または六寸×一尺×一尺七寸の大きさで主に木でできている様々な使用方法のある箱馬だ！しかし我々は「この箱馬」を知らない。いや知るよしが無いのだ！急に、現れたこの箱馬は、この空間にとつての異物でしかなかった！触れるべきか迷ったが、臆病な我々は結局触れることができずにいた！我々は、その箱馬について知ることには、恐怖すら感じていた！

暗転。

男 3 ここはじゃんけんで決めるのはどうだろうか。

男 1 と、男が言った。

男 2 何を決めるのだ？

男 1 と、男も言いかえした。

男 3 この箱馬を触るのだ。負けたものが。

男 1 男は倒置法を使った。

男 2 うんこがしたい。

男 1 男は話を聞いていなかった。そしてなんやかんやあって私が触ることになった。ちくしようにんだ災難だぜ。

男3 と男は漏らしたがそんなことはどうでもいいからさっさと触りやがれと私は思っていた。

男1 なんて薄情な奴なんだと私は思っていた。

男3 私はその倍、なんて薄情なやつなんだと思っていた。

男1 私はその四倍、なんて薄情なやつなんだと思っていた。

男3 なら私は十倍だ。

男1 なら私は百倍だ。

男3 なら千倍。

男1 一万倍。

男3 億。

男1 兆。

男3 京。

男1 該。

男2 私はうんこがしたいと思っていた。

男1 私たちは無視をした。

男2 私は無視をされた。

男1 私は思い切ってその箱馬に近付いた。

男3 我々は息をのんだ。

男1 ……そして一歩引いてみた。

男3 引くのか。

男1 やはり怖いなと私は思った。

男3 おい。

男1 怖いものは怖いのだ。

男2 やはりじゃんけんをするべきではないのかな。

男3 そうだな。

男2 私はうんこがしたいが。

男3 少し黙っていてはどうか。

男1 じゃんけんか。確かにありかもしれないが、しかし運要素の強いモノで決めるのはどうなのだろうか。と私は思った。

男3 その語り部みたいな喋り方やめたらどうだ。

男1 私はやめる意思はなかった。

男3 お前ムカつくな。

男2 じゃんけんが運要素とは限らないぞ。

男1 どういうことだ。

男2 じゃんけんとは駆け引きである。

男1 おい、この男は何を言っているのだ。

男2 じゃんけんとは駆け引きである。

男3 ついに頭がおかしくなったのか。

男2 そうではない。じゃんけんは決して運要素だけではないゲームである。と言っているのだ。

男1 そんなことはないのではないだろうか。

男2 俺はチョキしか出さない。

男1 ……なに？

男2 俺はチヨキしか出さないと言ったのだ。
男1 お前まさか。
男2 どういうことかわかるか。
男1 私は動揺していた。
男3 だからやめろと言っているだろうに。
男1 いいのか？私はグーを出すぞ。
男2 かまわん。
男1 それでは負けてしまうぞ。
男2 そうなるな。
男1 ・・・私はパニックだ。
男2 ではいくぞ。
男1 待ってくれ。せめて考える時間をくれ。
男2 じゃん、
男1 待ってくれ。
男2 けん、
男1 あ、
男2 ぼん。

間。

男1 パー、男2 チヨキ、男3 チヨキ。

男2 結果は一目瞭然だ。
男1 負けた。
男2 心が弱いな。
男1 おのれ。
男2 さあ、触れ。
男1 待ってくれ。
男2 待つのは触ったあとだ。さあ触れ。
男1 お前もなぜチヨキを出したのだ。
男3 便乗したのだ。さあ触れ。
男1 なぜチヨキを出すとわかったのだ。
男3 心が強いからだ。さあ触れ。
男1 そんなバカな・・・。
男2 & 3 これが駆け引き！
男1 ・・・。
男2 & 3 さあ、触れ。
男1 なぜだ・・・。
男3 男は敗北した。
男2 男はうなだれた。
男3 その姿は哀愁に満ちていた。
男1 運要素ではないのか。
男2 男の頭の中は、今までの計算式が崩されたことによるショックとあと男の口が異様にくさいと

いう新事実で埋め尽くされていた。もはや触るしかない。男がそう開き直るのにそう時間はかからなかった。

男1 と、同時に、私は箱馬に触れていた。

間。

男3 男は意外といさぎがよかった。

男2 一瞬、それは一瞬のできごとだった。男が箱馬に触れたと思ったら、次の瞬間男は後ろにとび跳ねていた。

男1 ここまで実に0.5秒。

男3 一瞬、一瞬のできごとだった。

男2 我々は何が起きているのかまったくわからなかった。

男1 わからないのも当然である。なぜなら何も起きていないからだ。

男3 男は触れたか触れてないかわからないぐらいで自分から後ろにとび跳ねたのだ。

男1 恐ろしさのあまり、後ろにとび跳ねてしまった。

男3 拍子抜けだった。

男2 なぜとび跳ねたのだ。

男1 わからない。ただ、自分の幼いころに触れたような感覚だった。

男3 と、男は少し悲しげに言った、

男2 と、同時に少し嬉しそうだった。

男1 おい、勝手に感情を付けたすな。

男2 しかし我々の興味は俄然箱馬に集中していた。

男3 圧倒的、圧倒的存在感である！

男1 我々のように考えることもできない、動くこともできない、所詮使われるべき箱馬が、圧倒的！

男2 我々は思わず、無駄に二度見をした。

二度見をする。

男3 我々は考えた。持ちうる知識、経験、すべてを構築しては破壊し、そして再構築し。

男2 しかし最終的には破壊で終わってしまうのだった。

男3 なぜ急に現れてなぜ今もここに佇んでいるのだお前は。

男1 男はついに箱馬を人として扱いだした。

男3 なぜだ。なぜ現れた。わからない。おまえはいったいなんなんだ。なんなんだ。喋れよ！

男2 逆切れだ。

男3 我々がこんなたかが木箱野郎に、理解の世界のほころびを作られるなどあってはならないことだ！許せん！（首を切るポーズをしながら）壊す！

男1 しかしこの世界には知識と「無」しかなかったのでこの木箱を破壊するための道具なんて存在していなかった。

男2 だからこそこの木箱の存在が恐ろしいのだ。

男3 無から有が生まれるなんてありえない！ああ気が狂いそうだ！

男2 落ち着くんだ！

男3 落ち着いていられるか！これは由々しき、由々しき事態だっぺ！

男1 男は茨城出身だった。
男2 どうする、我々はどうするのだ。
男3 おめはデレすけだな！
男1 茨城弁で「おまえは何もできないんだな」という意味だ。
男3 もう一度触れてみるっぺ！
男2 男は興奮するとだっぺが出るのだ。
男1 私がか？
男2 おめいげえ誰がいると言うのだ。
男3 早く触るんだ。
男1 嫌だ。
男2 なぜだ。
男3 じゃんけんで負けたではないか。
男1 私は一度触れたのだ。次はどちらかが触れ。
男2 & 3 断る。
男1 なんてやねん。
男2 男は大阪出身だった。
男3 触れたくないからだ。
男1 そんなものは私も一緒だ。
男3 みんな一緒だ。だからせめてじゃんけんで負けたお前が触れ。
男1 だから一度触れたではないか。
男3 あんなもの触れたうちには入らない。
男1 じゃあどんなものが触れた内に入るのだ。
男3 座るとか。
男1 それはもはや触るではなく座るではないか。
男3 細かいことはいいだろう。
男1 細かいことはいいだろう。
男3 いいから早く座れ。
男2 そうだぞ。
男1 お前こそ座ればいいだろう。
男2 私はあれだ。箱馬はアレルギーなのだ。
男1 そんなものは聞いたことがないぞ。
男3 お前アレルギー体質だったのか。
男1 おいおいおいおい信じるな。
男2 そうなのだ。実は箱馬を見るだけで吐き気がするのだ。
男1 嘘をつけ嘘を。
男2 今でも吐き気が止まらない。おえええ。
男3 では俺もアレルギーだ。
男1 何。
男3 おえええ。
男2 おえええ。
男3 おえええ。
男2 おえええ。
男3 おえええ。

男1 ありえない。たったひとつの箱馬ごときで男たちがおかしくなるなんて。

男2 男は恐怖を感じていた。おえええ。

男3 我々はおええええ。

男2 おえええ。

男3 おえええ。

男1 おえええ。

男2 おえええ。

男3 おえええ。

男1 ストップ！

間。

男1 多分なんだが、今凄い空気だ。

間。

男1 冷静になろう。

男3 すまない。

男2 とりあえず順序立てて考えて見るのはどうだ。

男1 なんの順序だ。

男2 この箱馬をどうするか。ゴールを見立てて。

男1 ふむ。

男2 そもそもこの箱馬に触れる必要があるのかということだ、

男3 それはあるだろう。

男2 なぜだ？

男3 異物だからだ。

男2 そもそも本当に異物なのか？

男3 どういうことだ。

男2 我々はこの空間に居ついている存在だが、同じようにこの箱馬も居ついている存在なのではないだろうか。

男1 ほほう、

男2 だから、我々は突然のこのあまり冷静になれなかったが、こいつは我々と同じなのではないか。

男1 しかし何もないとところから湧くというのはどうだろうか。

男2 あったのかもしれないではないか。何が。

男3 その何かがわからないから我々は驚いているのではないか。

男2 ひよっとしたらそんな問題ではないのかもしれない。

男1 ん？

男2 もっと神聖なる存在なのかもしれない。

男1 うすっぺらい言葉だな。

男2 だが実際わからないじゃないか。

男3 確かに。

男1 今さら神聖だなんて、無神論はどうなった。

男2 これが神だったらどうする。

男1 何い？

男2 今までこの空間に神は存在しなかった。しかし、新たに生まれたこの箱馬が、神なのかもしれないではないか。

男1 そんなはずないだろう。

男2 わからないではないか。

男1 これは無機物だ。それに神は常に人の延長線上だったはず。

男3 それは昔の話だ。

男2 そうだ。ずっとずっと昔の話だ。神がどんな姿をしていようが関係ない。信じることができるならな。

男1 信じることができるのか、この箱馬が。

男2 信じる者は救われる。

男3 救われる。

男1 ……急にどうしたんだ。

男2 そろそろ救われたいのかもしれない。

男1 何を言っているんだ。

男2 ほら、この角とか神々しいじゃないか。

男1 本当に何を言っているんだ。

男3 もう気付いているんだらう？

男1 なん、

男2 妹がいたときはこんなことはなかった。

男1 お前は何を言ってるんだ。

男3 お前も気付いているんだらう。

男2 あのところは日常は日常のままだった。

♪ バツハ「主よ人の望みの喜びよ」

男1 おい。

男2 私はただ今日という日を生きていたんだ。

男3 おいと言われても、なんだとしか言い返せない。

男1 さつきから言ってることがわからん。脈絡がないぞ。

男2 この箱馬に触れた時、懐かしいと思ったんだ。

男1 ……おい。

男2 そうだ。そうだったんだよ。

男1 無視か。無視なのか。

男3 お前も気付いているんだらう。

男1 お前はそれしか言わないな。

男3 気付いたか。

男1 ……ん？あ、それを言っていたのか？

男3、笑顔。

男1 気持ち悪いな。

男2 時間。時間という概念が可能ではなくなるほど、男たちはそこにいた。きつかけは妹が死んでからだった。たった一人の妹。優しい子だった。父親似だった。両親は、妹が小さい時に死んでしまった。父は家の近くの工場で冷蔵庫を作っていた。毎日毎日冷蔵庫を作っているのは、「誰がこんなに冷蔵庫を必要としているのだ。」とつぶやいていた。母とは高校時代の同級生で、八年間交際を続けてから結婚したらしい。近所の人たちからも仲睦まじ委夫婦と評判だったらしい。新婚旅行はハワイというベタな選択をした割に宿泊先で体調を崩して三日間インドア生活。帰って来てから日焼けのしてなさに驚かれた。と幼いころに聞かされた。しかし両親の話は今関係ないので忘れよう。そういえば忘れてはならない思い出が一つある。それは両親がなんやかんやで亡くなって二年たった日のこと。父の日だった。朝早くに両親の仏壇の前で線香を上げていると、

ドアがいきなり開く。一瞬の間。そして

女 宇宙とは！無限に広がる劇場の様なものである！そしてここはその果ての果て！の果て！つまりどこでもない場所！そこに男たちはいた！男たちはすべてを超越した存在としてそこにいた！しかし箱馬によってその存在にほころびが生まれ、今、男たちは固体ではなくなりかけている！はずである！そしてさらに、侵入者によって彼等は自らの存在に疑問を持つ！さあお芝居をはじめましょう！これらは全てフィクションである！！

ドアが勢いよく閉まる。

男2 我々は幻覚を見た。

ドアが勢いよく開く。

女 付け加えると！

男達 うわぁ！

女 フィクションとは全て所詮現実で、本当の虚構とは見ることも感じることもできない！つまりこれも現実で！宇宙の話で！だからこそ！ロマンがある！

ドアが勢いよく閉まる。
間。

男2 ……なんだ？

男1 女？

男3 女なんているか。馬鹿かお前は。

男1 しかしいたではないか。

男3 宇宙の果ての果ての果てに女がいるはずないだろう。馬鹿かお前は。

男1 しかし実際、

男3 馬鹿かお前は。

男1 つかぶん殴ってやる。が、このことは心に秘めて置こう。
男2 男は心の声が漏れだしていた。
男3 お前心の声が漏れて来ているぞ。
男2 男は指摘した。
男1 (爽やかに笑いながら) 何を言っている。
男2 男はごまかした。しかし男は見抜いていた。
男3 お前今ごまかしたな。
男1 ギクリ!
男2 男の心の音が鳴った。
男1 あとお腹も鳴った。
男3 ズバシユツ!
男1 男は無駄に擬音を言った。
男2 お前は全体的に無駄が多いな。
男1 とにかく女はいた。それは事実だった。
男3 それは俺に言ったのか。
男1 そうだ。
男3 そうか。
男1 わかるだろう。
男3 わからなかった、すまない。
男1 うん?
男3 すまない?
男1 私は違和感を感じていた。
男3 しかしやはり女なんていないぞ。
男1 そんなはずないだろう。

女入ってくる。

男達 女だ。
女 こんにちは。
男2 誰だ。
女 あ、お話中でしたか。
男1 誰だ。
女 また出直してきましようかね。
男3 誰なんだ。
女 じゃ。

女、出て行ってドアを閉める。
間。

男1 誰だったんだ。
男2 わからない。
男3 俺たち以外の、人?

男2 それも女だ。
男達 こんなことは初めてだ。

女また入って来る。

女 こんにちは。

男達 わっ。

女 これはフィクションです。

男1 はい？

女 これはフィクションです。だから気にしないでください。

男3 何を言っているんだ。

女 私は一応スペース中国人って言う設定なんですけど、

男2 ん？

女 そんな設定もフィクションなので忘れてください。

男3 ならなぜ言ったんだ。頭から離れなくなってしまうではないか。

女 いま大事なのは私たちが出会っていることで、ともかくにもあなたがたは目の前のことに集中して下さい。

男2 この女は何を言っているんだ。

女 いや驚かれていますね。いや驚かれるのも無理ありません。そりゃあ急に宇宙の果ての果ての果てにこんなかわいらしい侵入者がやってきたんですから。欲情したっていたしかたない！

男1 おい。

女 しかし大丈夫！全ては必然！なぜならこの箱馬は私が倒すべきスペース箱馬！この箱馬によって私の母なる星、スペース北京は滅ぼされました。しかし生き延びた私がこいつを仕留めるために遠路はるばるワーパワーワーブを繰り返してきたのです。だから止めないで、みなさんどうか私に仇討させてください！！

男3 よくしゃべる女だ。と我々は思った。

男1 我々は倒置法を使った。

女 さあ観念しなさい箱馬。私が今から右ひじと左ひざを合わせることによって生じる爆発を利用した技、ビッグバンエクササイズを放ったが最後、あなたはただの木片になり下がるわ。え？あなたにも家族がいるですって？そう……。でもごめんなさい。私はあなたを倒すためだけに生きてきたの。だからあなたには死んでもらわないと、死んでもらわないと私が死んでしまうのよ！！というストーリーを今から男達に説明しようと思うが上手くできるか不安である。

男1 全部筒抜けだぞ。

女 ええ！あなたたち心を読むのが得意なのね！

男1 いやめっちゃ喋ってたやん。

男2 男は大阪出身であった。

男3 そのことについてはすでに触れたぞ。

女 私は京都出身です。

男1 話しかけてくるなよ。

男3 え・・・スペース北京出身じゃ、

男1 話になつかるなよ！

男3 あの、ビッグバンエクササイズってどうやるのだ。

男1 おい！

女 えっと右ひじと左ひざをこうやって合わせて・・・。

男2&3 ほうほう。

男1 お前も教わるな！

女 ああ、あなた、左ひじと左ひざを合わせてしまってるわ！それではただのビッグバンディフェンス！防御しかできないわ！

男1 なんでもいいがこつちの世界に戻って来てくれないかな。

女 さあみんなと一緒に！ビッグバン、エクササイズ！

男1以外みんなやる。

男1 やめろ！

女 スペース箱馬恐るべし！ピクリともしないわ！

男2 そりゃあ箱馬だからな。

男1 おお！戻ってきた！

男3 ここはやはり更なる技を繰り出すしかありませんよ！

男1 あいつは手遅れのような。

男2 うん。

女 ま、まさかあの伝説の技、ビッグバンブラックホールを使わないといけないときがくるとはね！

男3 ええ！？あのビッグバンブラックホールを！？

男2 男はノリノリであった。

女 さあみんなも力を合わせるのよ！

男2 と、女は男たちに無茶ぶりをした。

男1 断る。

男2 と男は言った。

女 あなたも！

男1 と、女はさつきまで乗り気だった男に言った。

男2 断る。と私は言った。

女 ・・・とうとう生き残ったのはあなただけになったようね。

男1 我々は存在を殺された。

男3 どこまでも着いていきます！

男2 男は俄然乗り気だった。

女 さあ、行くわよ。右ひじと左ひじと、右ひざと左ひざを一点に集中するのよ！！

男3 はい！

男1 これもエクササイズっぽいな。と私は思った。

女 ちなみに！この、微妙に空いた隙間が、ブラックホールのモチーフである。

男1&2 ふーん。

男3 できました！！

女 ではいくわよ！SAY！ビッグバン、ブラックホール！！

男3 ビッグバンブラックホール！！

男1 しかし箱馬は微動だにできなかった。

男2 まあ当然と言えば当然だな。

女 やった！スペース箱馬を倒せたわ！！
男1 もはやなんでもありませんだ。な。
男3 こうして宇宙に平和が訪れるんですね！！
男2 なぜ我々は宇宙の果ての果ての果てで芝居なんかやっているんだろう。と私は思った。
女 そう、宇宙に平和が訪れたわ。
男1 案外平和は簡単なんだな。と私は思った。
女 しかし！そのときは長くは続かなかった！なぜなら、宇宙には圧倒的な黒い闇が無限に存在しているから！それがあつた限り、この劇は終わらないわ！
男3 おお！
女 次回！
男1 続くんかい！
女 男は大阪出身のようです。
男2 だからさつき言ったって！
女 次回！スペース中国人対スペースドラマセット！スペースシンバルは裏切りの音色！絶対見てよね！
男1 自由だな。と宇宙は思った。
女 ええとスペースドラマセットって言うのは・・・。
男3 女はこのあと三時間ほど次回作についての話をした。しかしこの空間には時間の概念などなかったのそれは結局どれぐらいの時間なのかはわからなかった。女の正体はスペース劇団員で、スペース演劇を作るために日夜一人で稽古しているらしい。久しぶりに人と会えてよかったと、女は言っていた。宇宙の果ての果てにはもう人はいないらしく、宇宙の果ての果ての果てに来た、人に出会えて本当にうれしかった。と満面の笑みで語っていた。
女 そして新必殺技の、ビッグバンラジオ体操！
男2 嬉しそうに話す女を見て、私は妹に似ているな。と思った。そういえば妹もお芝居がしたいと言っていた。中学校の時、学年劇で行う台本を握ったままフローリングの床で寝ているのを何度も見た。将来は天国へ届くようなお芝居を作りたいとも言っていた。結局それは叶ったのだろうか。ここへ来てしまって、私にはもうわからなくなった。
男1 ここへ来たことを後悔しているのか？
男2 男は私に聞いてきた。
男3 そんなことはないぞ。ここへ来てわかったことがいくつもある。しかし、あまりにも遠くに来すぎてしまったのだな。と実感したのだ。と男は言った。
男2 結果的に妹は死んだので、もし天国があるならば、きっと両親たちに直接お芝居をしているんじゃないかな。
男1 そうか。
男2 しかし、私の胸には届いたよ。なんてことは恥ずかしすぎる言葉なので胸の内に秘めておこう。
男1 筒抜けである。
女 そして、この話はこのまま収束へと向かいます。これから一切話は大きくなることはありません。なぜならそのときがきたからです。膨張はもう、終わりです。
男1 まだ喋るのか。
女 ところでみなさん。
男2 急だな。
男3 なんだ？

女 今から私がこの箱馬を壊すことになんら抵抗はないですか？

男3 なぜ壊すのだ。

女 なんとなくですけど。壊すことに異論はありますか？

男1 ない。

女 本当ですか？

男3 ないと言えば嘘になるかもしれないな。神だから。

男2 ああ、そうだった。そうだった。

男1 記念だし、残しておいたらいいのではないか。

男3 何の記念だ。

男1 出会いの記念にだ。

男2 なるほど。そうだな。壊しては駄目だ。残しておいてくれ。

女 わかりました。

男2 そう言って女は箱馬に座った。

女、箱馬に座る。

男3 ああ、神に座るとはなんたる暴挙。

女 神なんていませんから。実際。

男1 じゃあ椅子として使ってくれ。

女 そうします。

男2 宇宙は膨らんでいく一方だな。

男たち そうだな。

女 なんで膨らむんですからね。

男1 縮まらないからさ。と、私は言った。

男2 私も言った。

女 私は言う前からそんな気がしていた。

男3 私は言わなかった。

男1 なぜだ？

男3 言ってしまうと、楽しみがなくなる気がしたのだ。

男たち ああ。

女 宇宙のすべては、口に出すとしても浅はかなものになってしまふ。たとえどれほど実証されていようと。それならば、ロマンという名のフィクションで塗り固めて、また無限の宇宙へ旅に出よう。

男2 そう言って女は箱馬をたたき壊した。握力が二十五キロあるらしい。スペース中国人というよりは、スペースゴリラだと私は思った。ただ純粹に怖かった。スペースゴリラは箱馬を壊すと、もともと存在すらしていなかったようにどこかへ消えた。そして宇宙の果ての果ての果てには、木片とドラムセットと我々男たちだけになった。あれから無限の時間が流れた。しかし、ここには時間という概念がないのであれがどれくらい昔になったのかはわからない。ただ我々がここにいるという事実と、スペースゴリラに出会ったというわずかな思いだけが残った。しかしその思いも遠く遠くへ行く。また宇宙は膨らみはじめたということだろうか。そういえば女は箱馬を壊す瞬間、もう帰ろうよ、と涙を流しながらに言った。意味はわからなかったが、それを見て、やはりこの女は妹に似ているな。と私は思った。

【上演に関して】

- ※ 上演を希望される場合はその旨を「プロトテアトル」までご連絡ください。
- ※ 台詞の変更・追加・削除などは基本的に自由にしていただいても構いません。
- ※ 稽古場やワークショップでの使用はご連絡不要です。（でもご一報いただけると喜びます…。）

【連絡先】

プロトテアトル

e-mail: prototheater@gmail.com